みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

ネパール語

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 真木人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009278

ネパール語

系統　インド・ヨーロッパ語族インド語派
文字　デーヴァナーガリー文字
話者数　約 2,500 万人

❶ ネパール語の研究とネパール語辞書の編纂は，英国インド軍に雇用されたグルカ兵など，北インドに移出したネパール人を対象に，イギリス人によって始められた。1820 年には，エイトン J. A. Ayton がはじめての文法書 *A Grammar of the Nepalese Language* を出版したが，この頃から英国インド軍のイギリス人士官により語彙集も作成されだした。1887 年，ターンブル A. Turnbull は，聖書の翻訳のため語彙集つきの文法書を発表した。これが後に，ネパール語初の本格的な辞書の出版に結実することになる。

その辞書とは，ダンカンとプラダーン H. C. Duncan & G. P. Pradhan 編の『キルゴール牧師の英語・ネパール語辞典』(*Rev. R. Kilgour's Dictionary English-Nepali*, 1922, 再版 1986, ニューデリー, Asian Educational Services, A5 変型判, 391 ページ, 語彙数不明) である。ダンカンの序によると，1905 年に死去したターンブルの辞書編纂作業は，キルゴールに引き継がれた。さらに，キルゴールが 1909 年にダージリンからイギリスに帰国し，旧約聖書のネパール語訳も完了すると (1914 年)，その後の作業は編者に任された。こうして，何人もの情熱がそそがれ，ついに世に送り出されたのがこの辞書であった。

同じ頃，ロンドン大学のサンスクリット語の教授であったターナー Ralph Lilley Turner も，グルカ兵から採録した材料をもとに辞書の編纂にとりかかっていた。ターナーによれば，ダンカンとキルゴールは彼らが集めたデータを自由に使ってよいと提供してくれ，ここにもう 1 つの記念碑

的な辞書が誕生することになる。1931 年にターナーが出版した『ネパール語比較語源辞典』(*A Comparative and Etymological Dictionary of the Nepali Language*, 詳細は❷(1))である。

他方で，会話例文と語彙集つきの文法書のなかには，茶栽培郡労働者協会 (Tea Districts Labour Association) 編の *Language Hand-Book: Nepali* (カルカッタ，出版社不明，1927，B5 変型判，86 ページ) のように，茶園の移民労働者を管理する目的で作られたものもあった。そこには，「なぜ茶葉を入れるかごにレンガのかけらが入っているのか？」，「重さをごまかす心算か？」，「もし帰省して労働者を連れてきたら，一人につき 10 ルピーを与えよう」といった例文があり，当時ネパールからの移民がどのような暮らしをしていたかが推測される。また，グルカ連隊の中佐であったロジャーズ G. G. Rogers が書いた『口語ネパール語』(*Colloquial Nepali*, 1950，再版 1991，ニューデリー，Asian Educational Services，A5 変型判，124 ページ) の例文も興味深い。内容はおのずと指揮を伝える命令文が多いが，「あの Jap を捕まえて，ここに連行しろ」とか，「自分のマシンガンをうって日本軍を壊滅させた」といった，第 2 次世界大戦時ならではの文例が散見されるのである。

ネパール国内に目を移すと，「1901 年に，カトマンズで新聞ゴルカパトラ (*Gorkhāpatra*) が発行され」(石井，1992: 32) るなど，20 世紀初頭になってネパール語の文法と正書法の標準化が待望されはじめた。そうしたなか，ネパール人によるはじめての文法書『ゴルカ語文法「月光」』(गोरखा भाषा व्याकरण चन्द्रिका *Gorkhā Bhāṣā Vyākaraṇ "Candrikā"*) が，1912–1915 年にパーンデ हेमराज पाण्डे Hemarāja Pāṇḍe により書かれ，1913 年には「ゴルカ語出版委員会 (Gorkhā Bhāṣā Prakāśinī Samiti)」が設立された (Hutt, 1988: 44, 63)。なお，ゴルカとは中部ネパールの地名であり，そこから出たゴルカ王朝がネパールを統一したため，ネパール語はゴルカ語ともよばれてきた。さらにいえば，グルカ兵 (Gurkha) はこのゴルカが訛った言葉である。後に「ネパール語出版委員会」と改名した

この機関は，ネパール語の標準化と他言語の文学作品をネパール語に翻訳する事業を振興するとともに，1936年にネパール人研究者によるはじめての英語・ネパール語辞書を出版した（Hutt, 1988: 66）。他方で，この委員会は出版物を検閲する役割も担っていた。

日本でいう国語辞典，すなわち「ネパール語・ネパール語」辞書の出版は，1962年まで待たねばならなかった。シャルマ बाल चन्द्र शर्मा Bāl Candra Śarmā 編の『ネパール語辞典』（नेपाली शब्द-कोश *Nepālī Śabda-koś*, 1962, カトマンズ, Royal Nepal Academy, 再版 2000, カトマンズ, Sṛiṣṭi Prakāśān Cāvāhil, B5 拡大判, 1,146 ページ, 語彙約 6 万）がそれである。この辞書はネパール初の国語辞典として画期的であったが，1つの単語に複数のつづりを認めたため，体系的な正書法を構築するには至らなかった。その後，1983年にポカレル बालकृष्ण पोखरेल Bālkṛṣṇa Pokharel 他が『ネパール語大辞典』（नेपाली बृहत् शब्दकोश *Nepālī Bṛhat Śabdakoś*, 詳細は❷(3)）を編纂したが，この辞書に至って，その他の文法書や規則集の貢献もあり，ネパール語のある程度の標準化が進んだ。

1950年以降，ネパールではネパール語を用いた近代的な学校教育が始まった。だが，ネパール語では今日もなお，出版物や人によって異なるつづりが用いられているのをときどき目にする。私たちは，つづりの一貫性など当然のことと思いがちだが，それは辞書や文法書の作成と言語政策や教育によって，はじめて形成されるものであった。ネパール語の辞書編纂の歴史は，こうした言語のもつ政治性を改めて気づかせてくれる。

〔さらに詳しく知るために〕

M. J. Hutt, *Nepali: A National Language and its Literature* (Kathmandu, Ratna Pustak Bhandar, 1988)

石井溥「ネパール語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第3巻（世界言語編 下-1）』（三省堂, 1992）

❷ (1) ネパール語史上にかがやく古典的辞書の筆頭は，ターナーが16年の歳月をかけて編纂した『ネパール語比較語源辞典』（ロンドン，Routledge & Keagan Paul，1931，再版1980，ニューデリー，Allied Publishers，A4変型判，932ページ，語彙約2万6,000）であろう。この辞書は，ネパール語史の初期における先駆的労作であり，再版後もネパール語を学習する外国人に活用されてきた。デーヴァナーガリー文字で表記された見出し語には，ローマ字転写が併記され，用例も多少収録されている。だが，この辞書の大きな特徴は，語源と他の言語との比較対照が詳細に記述されている点にある。巻末の約270ページ分は，他の諸言語から借用しネパール語化した，すべての収録単語（4万8,000語）の索引にあてられている。ヒンディー語の一方言とみなされてきたネパール語を，固有の言語として認知させた功績も大きい。

(2) ロングセラーで，ベストセラーでもある古典的辞書に，ミーレンドンク M. Meerendonk 編の『基本グルカ語辞書』(*Basic Gurkhali Dictionary*，シンガポール，出版社不明，1959，再版1986，Folkestone, Bailey Bros. & Swinfen Ltd., A7判，257ページ，語彙数不明）がある。半分が英語・ネパール語（この辞書では，グルカ語とよんでいる），もう半分がネパール語・英語からなる超小型の辞書で，グルカ兵やグルカ連隊のイギリス人士官はつねにポケットに携行していたそうだ。すべてローマ字表記であるうえ，ネパール語・英語パートの見出し語はアルファベット順に配列されており，外国人には使いやすい。

(3) 古典的辞書というには新しく，現代のすぐれた一般辞書としてとりあげるべきかもしれないが，あえてここでとりあげておきたい辞書がある。それは，現在手に入るネパール語・ネパール語辞書のなかでわたしが最もすぐれていると思う，ポカレル他編の『ネパール語大辞典』（カトマンズ，Nepāl Rājkīya Pragyā-Pratiṣṭhān，1983，B5拡大判，1,431ページ，語彙

数不明）である。この辞書は，シャルマの『ネパール語辞典』(❶)にくらべて語義説明がより詳細で，しかもその記述内容に味がある。ただし，残念ながらこの辞書にも用例は収録されていない。

それでは，どのような内容なのか。たとえば，janajāti（ジャナジャーティ）の項目では，まず，この単語が名詞で，サンスクリット語起源であることが記され，1. ジャングルを刈り払って耕し暮らす，ナーガー，コチェ，クスンダーのように，文明，教育などが遅れており，また，近隣住民からの影響も受けてこなかった後進カースト，2. 何らかの地域ないし共同体の人間集団，と説明される。

ジャナジャーティという言葉は，現代のネパール情勢を語るうえでキーワードの 1 つである。というのも，これは 1990 年の民主化運動（jana āndolan：人民運動）後，先住の民族集団ないし少数民族を包括的にさす言葉として，民族運動家のあいだで用いられ一般化してきたからだ。1997 年には，地方開発省のなかに「国家ジャナジャーティ開発委員会」という部局が設けられるなど，その新たな意味づけは定着しつつある。たとえば，後述する『現代ネパール語実用辞典』(❻(1))では，ジャナジャーティは ethnic group と訳される。だが，注意すべきは，ジャナジャーティの運動家はこれを nationalities（国民）と公式に翻訳していることだ。彼らは，国民として多数派と同等の権利を要求しているのである。

もう 1 つ，たとえば janatantra（ジャナタントラ）の項目。その語義は，「人民（国民）が自らの幸福のために，自らの努力と希望にかなうよう設立した政体。プラジャータントラ，ロクタントラ」と説明される。ふつうはいずれも民主主義と翻訳される，ジャナ（人民）タントラ，ロク（民衆）タントラ，プラジャー（臣民）タントラは，（ ）内の訳語が示すように微妙にニュアンスが異なるが，この辞書ではそこまで踏み込んでいない。だが，ジャナタントラの格調高い説明は，この辞書の良心をあらわしているようにわたしには思える。

❸ 現代のすぐれた一般辞書として自信をもって紹介できるのは，やはりポカレル他編の『ネパール語大辞典』(❷(3)) ということになろう。

もう1つは，シュミット Ruth Laila Schmidt 他編の『現代ネパール語実用辞典』(व्यावहारिक नेपाली-अङ्ग्रेजी शब्दकोश *A Practical Dictionary of Modern Nepali*) である(詳細は❻(1))。どちらも，カトマンズで容易に入手できる。

ところで，最近『ネパール語辞典』の編者シャルマ Bāl Candra Śarmā とは別人のシャルマ वसन्तकुमार शर्म्मा Basantakumār Śarmmā が，『ネパール語言海』(नेपाली शब्दसागर *Nepālī Śabdasāgar*，カトマンズ，Bhābhā Pustak Bhaṇḍar，2000，第4版2005，AB判，1,403ページ，語彙12万7,000) という辞書を出版した。語義説明は短く平凡で，用例は収録されておらず，単に収録語彙の数にこだわった辞書と思われる。入手しやすいが，見るべきところはない。

❹ 特筆すべき「ことわざ辞典」に，シャルマ झमकप्रसाद शर्मा Jhamak Prasād Śarmā 編の『ネパール語・英語ことわざ辞典』(नेपाली-अङ्ग्रेजी उखान कोश *Nepali-English Proverbial Dictionary*，カトマンズ，2000，B5変型判，518ページ，ことわざ約1万1,000) がある。出版社が明記されていないので私家版と思われるが，大きな書店で手に入る。この辞典では，ネパール語のことわざがデーヴァナーガリー文字で，その配列順に表記され，英語訳と類似する意味の英語のことわざが対照して示される。膨大な収録数に圧倒されるが，ただ，どのことわざがネパール人なら誰もが知っている一般的なものなのか判断できないうらみがある。ことわざに用いられる対象別，あるいは教訓別に整理したほうが，ネパールのことわざの特徴が読みとれたと思われ，使えそうで使えない辞典という感がぬぐえない。

❺ ネパールではまだ独自の百科事典が編纂されておらず，諸外国の百科事典を翻訳したものもない。人類学者で，現在は公職委員会（Public Service Commission）の委員であるガネッシュ・マン・グルン गणेश मान गुरुङ Ganesh Man Gurung 博士によると，かつてある研究者が日本の国際交流基金の助成金を得て，ネパール初の百科事典を編纂することになり，大勢の執筆者を招いた発足式も開かれたという。だが，百科事典はついに日の目を見ることはなかった。

❻ (1) ネパール語の学習者に最も使いやすいと思われる辞書は，シュミット他編の『現代ネパール語実用辞典』（デリー，Ratna Sagar, 1993，第 4 版 1998，A5 変型判，1,004 ページ）である。これは，はじめての本格的なネパール語・英語の学習辞書であり，日常よく用いられる語彙約 7,000 語にしぼって収録されている。巻末には，英語・ネパール語の索引として約 8,000 語のキーワードをあげている。索引とはいえ，その説明は詳しく，並みの辞書に匹敵する内容である。この辞書のよいところは，用例と熟語の解説がとても充実していることだ。主な見出し語には対義語も載せてあり，とくによく使う動詞の慣用句は下位項目を立てて詳しく用例が示される。つづりは，ポカレル他編の『ネパール語大辞典』（❷(3)）を踏襲している。

見出し語はデーヴァナーガリー文字で表記されるが，用例などはすべてローマ字表記で，これも初級者にはとりつきやすい。ただし，デーヴァナーガリー文字のローマ字転写方式は，一部の文字を発音補助記号をつけるかわりに大文字であらわす〔ṭa, ṭha, ḍa, ḍha, ṇa を T, Th, D(R), Dh(D, R), N に転写〕独特のもので，読むのに多少慣れを要する。もっとも，ローマ字転写と発音が大きく異なるときには，発音を示すつづりも併記される。たとえば，辞書を意味する śabdakośa は，発音として sabdakos が併記され，ś の音が s でもよく，語末の a は発音しないことが示されている。

(2) 日本人のネパール語学習者にとって便利な本格的辞書には，三枝礼子編著の2つの辞書がある。1つは，『ネパール語辞典』(大学書林，1997，菊判，1,010ページ，語彙約2万6,500)であり，もう1つは『日本語ネパール語辞典』(大学書林，2006，菊判，612ページ，語彙約1万3,500)である。これらの辞書は主に，ポカレル他編の『ネパール語大辞典』を参考に語彙が選ばれており，収録語彙の豊富さが利点である。用例や慣用表現は『現代ネパール語実用辞典』には及ばないものの，適宜あげられている。

❼ ネパール語・英語の辞書では，ターナーの『ネパール語比較語源辞典』(❷(1))が今もってその価値を失っていない。また，シュミット他編の『現代ネパール語実用辞典』(❻(1))も，すぐれた他言語対訳辞書（ネパール語・英語）として特筆できる。

他方，英語・ネパール語辞書のほうは，今世紀初頭からイギリス人の手で数点が編纂され，その後もネパール人の英語学習のために数多くが出版されてきた。なかでも熟語を比較的多くとり上げている点で実用的なのは，ディクシット नरेण्द्रमणि आचार्य दीक्षित Narendramani Ācārya Dīkṣit による『英語・ネパール語サージャ小辞典』(अङ्ग्रेजी नेपाली साझा संक्षिप्त शब्दकोश *Aṅgrejī Nepālī Sājhā Saṁkṣipta Śabdakoś*, カトマンズ，Sājhā Prakāśān，1976，再版1987，B5拡大判，920ページ，語彙数不明)である。書名のなかのサージャは政府の出版公社名に由来し，この公社は1972年，自社内に文法委員会を設立して文法の標準化に着手してきた。

よりいっそうネパール人の英語学習向けに特化した辞書には，アディカリ सीताराम अधिकारी Sita Ram Adhikari の『現代主要辞典—英語・英語・ネパール語』(*Modern Essential Dictionary: English-English-Nepali*, カトマンズ，Malla Press，1999，A5変型判，1,114ページ，語彙約3万)がある。この辞書では，英語の見出し語の意味が英語で説明され，デー

ヴァナーガリー文字によるネパール語訳が単語で記される。さらに，英語の見出し語を用いた英文用例が複数あげられている。

ネパールの都市部では現在，英語がネパール語と入り混じって使用される状況にある。そうした時代背景とニーズを反映した英語との対訳辞書は少なくない。プラダーン बाबुलाल प्रधान Babulall Pradhan による『ラトナのネパール語・英語・ネパール語辞典』(*Ratna's Nepali English Nepali Dictionary*, ヴァラナシ, Trimurti Prakashan, 2005, A5 変型判, 982 ページ, 語彙数不明) もその 1 つであり，こちらは英語とネパール語の両方で，ほぼ等分に語義説明がなされている。ネパールの老舗書店にして出版社であるラトナ・プスタック・バンダールの名を冠した辞書だが，読者として想定されているのは，おそらく，寄宿制ではないが「○○ English Boarding School」と命名された，多くの私立学校に通う児童たちであろう。なぜなら，そうした児童の保護者は教育にお金を惜しまないからである。

なお，他言語対訳辞書には，英語や日本語のほかにも，ロシア語，サンスクリット語，ヒンディー語とのものが出版されている。

❽ 日本語による文法書の基本文献に，石井溥『基礎ネパール語』(大学書林, 1986, 四六判, 266 ページ) がある。これは 1980 年に，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で開催された夏期語学研修の教材をもとに書かれた労作である。デーヴァナーガリー文字で記された文例には，そのローマ字転写が日本語訳の上にルビのようにそえられており，そこからそれぞれの単語の意味と語順が理解できる。デーヴァナーガリー文字の読み方に不慣れな初心者には，とてもありがたい配慮である。こうした工夫は，後述するいずれの英語の文法書にも見られないもので，本書の大きな利点と特徴である。

この他にも，三枝礼子とビニタ・パントの『ネパール語で話しましょう』(大学書林, 1989, B6 判, 217 ページ) や，山形洋一『おもしろく学ぶネ

パール語』(国際語学社，2003，A5 判，109 ページ) など，会話に重きをおいた入門書がある。また，最近出版された野津治仁『CD エクスプレスネパール語』(白水社，2006，A5 判，162 ページ) は，会話と文法解説がバランスよく配置されており，実用性が高い。

英語によるネパール語の文法書は，先にのべた古典的著作をのぞくと，マシューズ David Matthews『ネパール語コース』(*A Course in Nepali*, ロンドン，School of Oriental & African Studies，1984，再版 1990，カトマンズ，Tiwari's Pilgrim Book House，A5 変型判，344 ページ) が代表的である。会話の練習をしながら詳しく文法を説明していくスタイルは，同大学から以前に出版されたクラーク T. W. Clark の『ネパール語入門』(*Introduction to Nepali*, ロンドン，School of Oriental & African Studies, 1963，再版 1989，カトマンズ，Ratna Pustak Bhandar，A5 変型判，421 ページ) を踏襲している。

英語によるネパール語の教本は他にも多いが，どれか 1 冊を選ぶとなると，ハットとスベディ Michael James Hutt & Abhi Subedi の *Teach Yourself Nepali* (ロンドン，Hodder & Stoughton，1999) になろう。だが，英語を使うネパール人講師のもとで学習する場合を除けば，日本人学習者にとってそのメリットはあまりない。むしろ，ネパール語と日本語の語順がほぼ同じであることや，ネパール語の後置詞が日本語の助詞的な使われ方をすることを考慮すると，日本語で書かれた教本で学習をはじめるほうが，習得が早いと思われる。

南 真木人 (みなみ・まきと)